2017年9月号 第367号 bestopia.jp

パリ通信 第69号

アッシジの聖フランシスコ (3)

1208年の出来事 (3) 福音を述べ伝えるフランシスコ

はじめに

1205年スポレトで見た夢のお告げ以来1215年の現世との決別までフランシスコの心を揺り動かしていたのはパウロの告白に似ていないだろうか?これは自分自身のことだからそのように感じるのかもしれません。どの伝記記者もそのような内面にまで触れていませんが、パウロ書簡を愛読していたフランシスコもきっと読んだろうを(ローマ人への手紙7章15節から25節)引用します

『わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは 肉の人であり、罪に売り渡されています。わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。 もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、

わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。

わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわ たしを救ってくれるでしょうか。

わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです』・(新共同訳)

(1)フランシスコ説教を始める

1208年2月24日、ポルチウンクラの早朝ミサでの啓示を受けたその日からアッシジに異様な光景が見られた。フランシスコが街頭で説教を始めたのである(ポルチウンクラ聖堂の修復は1月に終わっている)

市のここかしこの広場や通りに、無色の毛織の粗い百姓着をきこみ、頭巾をかぶり、腰に縄を巻いた人物が現れ「主が平和を与えられますように!」と挨拶をし、大勢の人が集まると、そこへ行って、裸足で階段か石に乗って説教を始めた。イエスの時代の12使徒の姿を彷彿とさせる光景である。

彼の説教は単純素朴であった。その内容は「人間の最高善としての平和、掟を守ることによる神との平和、正しい行動による人との平和、良心の保証による自分自身との平和だった」(p69~70)

平和という言葉は関係概念で、身近には"戦争と平和"に代表される国と国との平和とわたし達は考えがちですが、平和の原点はわたし自身の中にある「内なる人」との平和の実現にあると考えます。フランシスコがよく唱えていた「平和の祈り」もこの考えを念頭におくと親しみをこめて理解できます。「内なる人との平和」は神との関係・対話により実現するものですから「神との対話」に通じるものです。

(2)弟子が現れる

フランシスコの変容と回心によってなされる説教を聞いて弟子が現れるが、ヨルゲンセン著では「最初の弟子はアッシジの信心深く素朴な男」だといわれているだけで、名も不明で、その他は何もわからない」とあります。

(父と断絶した後にフランシスコはグッピオの友人を訪ねています。

武田友寿著はレオネだろうと推察しています。レオネはカタリ派のグループと関係 あるため正当な弟子とはみなされていないのでしょう。然し、フランシスコの清貧 思想はレオネの影響が大きいと言われています。レオネは後にフランシスコの聴罪 司祭となっている。要検討)

①ベルナルドとカッターニー

歴史的に知られている最初の弟子はクインタヴァレのベルナルドである 彼は富裕で思慮深く、ボローニャ大学で法律を学んだ博士で模範的なアッシジの市 民であった。フランシスコの行動を「つかの間の戯れ」と思って観察をしていたが、 その本気さがベルナルドの「聖性へのあこがれ」に火がつき弟子入りを願ってくる (有名なエピソードは割愛)

その二日後にサン・ルフィーノ大聖堂の参事会員で法律顧問をしていたピエトロ・ ディ・カッターニーが弟子入りを願ってきた。 この二人が「弟子になるにはどうしたらいいか?」と尋ねると「イエス・キリストに相談し、み旨を示してくださるように、教会へ行って、主が弟子達にせよと命じられたことを福音書で読むことにしましょう」とフランシスコが言い三人は連れだってサン・ニコロ教会へ行き祈り、フランシスコが祭壇に上がって聖書を開いた。最初の箇所は「もし完全になりたいなら、行ってあなたの持ち物をすべて売り貧しい人にやりなさい。そうすれば天の宝をうけるでしょう」(マタイ19②、マルコ10②、ルカ18②)というみ言葉を見つけた。

もう一回開いたら「わたしに従いたいと望む人は、自分を捨て、自分の十字架をになって、わたしに従いなさい」(マタイ16億、マルコ8億、ルカ9億 14億) 更にもう一回開いたら「旅のためになにもたずさえてはならない」

(マタイ10⑩、マルコ6⑧、ルカ9③) というみ言葉が見つかった。

(この三度開いて決めるというのは当時の習慣でもあった「使徒の託宣」という儀式)

そこで、フランシスコは聖書を閉じて二人に言った

「兄弟たちよ、これがわたし達の生活規則であるばかりでなく、わたし達と一緒に 生活したい人々の生活の規則であります。だから、さぁ行ってお聞きになったこと をしてください」(会則の種が播かれる)

こうして二人は別々の場所で全財産を貧者に施し始めた。

②司祭ジルヴェストロ

ベルナルドの財産処分にはフランシスコが同道していた。そこへ司祭ジルヴェストロが現れた。(彼はフランシスコがサン・ダミアノ聖堂の修復の時に多くの石を安い価格で売ってくれた人である)彼はフランシスコに「あの時、わたしから買った石はずいぶん安かったね」(本音、もっと金が欲しいのだが)と。フランシスコはベルナルドの懐からお金をむんずと掴みそれを数えることなく司祭に手渡して言った「司祭様これでご満足ですか」司祭は礼を言って立ち去った。この時からジルヴェストロは自分の貪りの罪に悩み始める。後に1210年、回心して弟子となるときが来る。三番目の弟子ではない。

ベルナルドとカッターニーはすべてをきちんと片付けてフランシスコと3人でポルチウンクラで夜を過ごした。ここが今後の活動の中心となる所である。

③エンディオが弟子となる。

ベルナルドとカッターニーが弟子入りしたことはアッシジの市中で大評判となり、 昼は市場で、夜は炉辺の団欒でつきない噂の種となった。家族からこの話を聞いた エンディオは4月23日朝早く起きてサン・ジョルジュ教会のミサに出て、そこから真っ直ぐにポルチウンクラに行き弟子入りをした。ベルナルドの弟子入りの一週間後であった。エンディオの前歴は吟遊詩人であったようでフランシスコは自分たちを「円卓の騎士」と名づけて喜んだらしい。(武田友寿著p237)

④3人の弟子と共に宣教活動を始める

昔の使徒にならって二人一組になって宣教活動に入りフランシスコはエンディオと組み、アドリア海のアンコーナ(アッシジから132km)、リエティの谷(アッシジから121km)にも出かけた。その帰りに3人の弟子を伴ってきた。サッパティーノ、モリコ、帽子かぶりのジョバンニ(彼は間もなく脱落する)

フランシスコは6人の弟子に布教に出る前にポルチウンクラの森の中で語り聞かせた忍耐の勧めは次のような趣旨であった。

「わたしの愛する者たちよ。行って平和と改心の福音を述べ伝えなさい。苦しくともがまんしなさい。どんな質問にもへりくだって答えなさい。迫害する者を祝福しなさい。不正を加え悪口を言う人に感謝しなさい。なぜならこれらすべてのために天国で大きな報いをえるだろうから。学問がないからといって、なにも恐れるな。なぜなら、あなたがたが自分の考えで話すのではなく天の御父の霊があなたがたを通して話すのだから(マタイ10⑩)信心深く、善良で、平和を好む人はたくさん見つかるだろう。又キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるためにあなたがたは招かれて一つの体にされてのです。いつも感謝していなさい。キリストのことばがあなたがたの内に豊に宿るようにしなさい。智慧を尽くし互いに教え諭し合い、詩編と讚歌と霊的な歌により感謝して心から神をほめたたえなさい

(コロサイ人への手紙3億~(7))

(2)フランシスコが弟子に教えた讃歌

祈りの詩人でもあるフランシスコは多くの讃歌を作っていたと言われている。初期 の讃歌がヨルゲンセン著に記載がある。

神を畏れ敬え。神を誉め讃えよ。

全能の主に感謝し、礼拝せよ。

万物の創造主、父と子と聖霊の三位一体の神を。

改心せよ、改心のふさわしい実を結べ

すぐ死ぬ身であるのを、わきまえるべきなのだから。

求めよ、さらば与えられよう。許せ、さらば赦されよう。

人の罪を許さなければ、主はおまえたちの罪を赦されないだろう。

すべての罪を告白せよ。

悔い改めて死ぬ者は幸いである、天国に入るだろうから。

悔い改めず死ぬ者は災いである、

悪魔の子となり、その業をなし、永遠の火に入るだろうから。

用心して、あらゆる悪を避け、終わりまで善を固持せよ。

(3)弟子達の忍耐と伝道活動

フランシスコが旅のはなむけとした 忍耐の勧めを、兄弟たちはすぐ必要 とした。多くの人は彼らを気違いと 思って、ののしり、泥や石をなげつ けた。服をうばう人々もあったが、 兄弟たちは福音的人間として抵抗せ ず、半ば裸で歩き続けた。ある人々 は兄弟たちの頭巾をつかんで、粉袋 のように仰向けに引きずり回した。 フィレンツェでは寝るために軒先を 貸して欲しいと頼んでも断られた。



然し布教の旅から戻るときには4人の兄弟を連れていた。

フィリッポ、(サン・コンスタンツォの)ジョバンニ、バルバロ、(ヴィギランツィオの)ベルナルドである。リエティの谷にから戻ってきたフランシスコはアンジェロ・タンクレディという騎士を連れ帰ってきた。

1208年、夏頃には仲間は11~12人に増えていた。数が増えたのでポルチウンクラの小屋では住めなくなり20分程の距離にある小川の曲がりくねった所に移住した。リヴォ・トルトの納屋といわれる狭い小屋であった。

弟子の数が増えたための問題は毎日の托鉢の生活に支障が生じたことである。弟子達が一碗の食べ物も貰えず戻ってこともある。街に出れば子ども達に石を投げつけられた。托鉢に回る弟子達が多くなるとアッシジの市民達は煩わしく迷惑がった。そればかりでなく市民はこのグループに警戒の目を向け始めグイド司教に訴えた迷惑行為として訴えた一般市民もいたであろうし、異端運動として捉えた学者や聖職者からの訴えもあったと考えられる。

明日を思い煩わない自由さも他から見ると危険にみえた。フランシスコを温かく見まもってきたグイド司教が見かねてフランシスコを部屋に呼んだ。

(4)フランシスコの苦悩

フランシスコの苦悩は弟子が増えるにつれ深刻さが増していた。

行動派であったフランシスコは洞窟でひとり祈る隠修士でもあった。リヴォ・トル トの上流に洞窟(カルチェリーといっていた)を見つけ彼は自問し祈った。

自分はリーダーになっている。弟子をまとめ、教え導き、指揮監督をしなければならなかった。そしてイタリアの各地の街頭に足を運び、人々に福音を伝え、平和のメッセージの実践者とて人々に尊いその意味と価値を宣べ伝えて歩かなければならなかった。あのポルチウンクラの啓示を受けるまで考えてみたこともなかった。放蕩の生活から抜け出ること、無為の日々から這い上がること。フランシスコが望んだことは、自分ひとりが罪から救われることであった。その可能性がみえてきた時に、彼は師と仰がれ、慕われ、指導する立場となっていた。「個から衆へ」個人の救いだけでなく衆人の救いへと使命が広がっていた。それは彼ひとりで出来ることでもなかった。その戸惑いの心境とヨルゲンセン著は次のように記している。

「わずか数年前は道楽者の中の道楽者、罪人の中の罪人だったのに、あえて人の道案内者、弟子達の師となるとは、いったい何ものなのだ。あえて他人に説教し、戒め、導くとは、イエス・キリストの名をけがれた口にするのにも値しないのに、いったい何ものなのだ。過去と未来の自分の姿を考えるなら、いま心の奥底では神の助けをまだ得ていないのだから、これから神が自分を助けてくれないとしたらーーーそんなことを考え、また自分を愛してついてくる人々が、自分をどう思っているかを考えてみると、ぞっとして、恥ずかしく穴があったら入りたいくらい」謙虚な祈りの姿勢、妥協にない悔い改めと神との平和を渇望していた。

1209年の出来事

(1)グイド司教との対談、

フランシスコはグイド司教を「魂の父」と呼んでいる。実父との裁判に立ち会って 裸のフランシスコにマントを掛けたときからグイドは温かく彼を見まもってきてい た。

「あなたの理想は高すぎる。宗教指導者として行き過ぎだと思う。兄弟達に、少なくとも日常生活に事欠かない位の所有は認めるべきだ」とグイド司教の助言に対して

「司教様、財産があったら、それを守る武器も必要でしょう。財産のために、隣近所の人との争いが起こり、神と人への愛が傷つけられます。この愛をそっくり保つために、この世でなにも所有しないと、かたく決心しているのです」とフランシスコは答えている。フランシスコが望んだのはナザレのイエスの望んだことだった。人間はできるだけ所有しないこと、生計のために自分の手で働くべきで、働いても駄目な時は援助を求むべきこと(托鉢)いらぬ心配をし、余計な財産をためないこ

と、小鳥のように自由に振る舞い、世俗の罠にはまるべきでないこと、神にお恵み を感謝し、その業の素晴らしさを讃えて生きるべきことである

(ヨルゲンセン著p90)

グイド司教はフランシスコの考えの中に異端性を認めることができず、むしろ自分 を超えているフランシスコを祝福して対談は終わった。

(2)リヴォ・トルトで会則の創案

これを年表に取り上げているのはわたしの手元にある著書では武田友寿著「聖者の詩」だけです。ともかく集団ができると手続き上、先ず必要になるのが入会の条件です。その為に集団の理念が明らかにされなければならない。集団の存在理由にかかわることである。弟子が増え必要に迫られて会則をつくらねばならなくなったと同時に異端が増えていく中で説教権をローマ法皇から承認してもらう外的な理由もあって会則が必要になった。

最初の会則はフランシスコが自ら行動してきたことを文章化するから始まったと推 定します。最初の会則は聖句から合成されている

- ①マタイによる福音書10章⑨⑩「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である」
- ②マタイによる福音書19章②「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それからわたしにしたがいなさい」
- ③マタイによる福音書16章④「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」
- ④ルカによる福音書9章③「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも 金も持ってはならない。下着も二枚は持って行ってはならない」

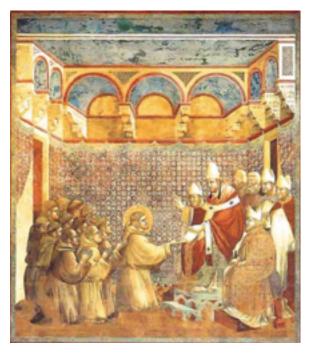
フランシスコが「簡単なことば」で書かせた会則案は「福音的生活法=福音を守ること」であった。「働く者が食べ物を受けるのは当然である」ように彼は日常生活をするためには働くことを命じ、働いた報酬は金銭以外は素直に受けた。仕事がなければ托鉢して食べ物をうることを実践し勧めた。

無所有清貧の精神が基調となって自分の食べ物は労働か托鉢で自分で工面する。「自分の十字架を負って、わたしに従いなさい」と従順を求めている。

組織の自己運動のように会則はその後時代の変化によってフランシスコの思いと関係なく複雑に改定されていく。

ともかく、1209年の最初の創案は簡単であった。これをもってフランシスコはローマ法皇に謁見を求めることになります。

1210年の出来事



(1)「個から衆へ」の道の確立を求めてローマへ

ポルチウンクラの啓示を受けてから「個の 救済」から「衆の救済」という使命に目覚 めたフランシスコは大衆に説教をしなけれ ばならい。当時は異端の続出という時代で 「説教をする資格」を得なければ異端視さ れる恐れがあった。

(1200年頃の反教皇的、反教会的な動きは 宗教改革の世紀や革命の時代よりも強かっ たとヨルゲンセン著は記している。

当時の教皇はイノセント3世で教皇権への 完全な反抗の時代でこの反抗は宗教的で且

つ政治的でもあった。中でも恐れられていたのがアルビ派集団であった。p96)

増えていく弟子達の使命が果たせるように、自分たちの伝道内容、使徒にならった 生活様式がイエスの教えに従順であることをローマ法皇に容認してもらうためにロー マ行きを思い立った。グイド司教の勧めがあったかも知れない。

1210年の春のある日、グイド司教がローマに滞在している日をねらってベルナルドと数名の弟子を伴ってローマに向かった。

グイド司教はジョバンニという枢機卿と知己であったので、一行はこの枢機卿の家の泊めてもらうことになった。このことはフランシスコ達には幸いした。生活態度を見てもらうことによって異端や邪教でないことが容易に枢機卿に認められたからである。

数日経つと枢機卿は教皇を訪ね「非常に完全な男を発見しました。彼は福音書のことばによって生き、なににつけ福音の完全さを顧慮しています。主のみ旨は、彼によって全世界の教会の信仰を新たにすることにあると思われます」と報告した。教皇は謁見した。第一回目は身なりが汚らわしいので豚扱いされ、早々に退席させられた。フランシスコは食い下がり第二回目の謁見となった。教皇は考えを聞いた、そして興味を示した。認可を枢機卿会にかけることになって、第三回目の謁見を待つことになった。フランシスコの考えと希望は枢機卿会の中で大反対を招いた。然し、ジョバンニ枢機卿の鶴の一声であらゆる反対を鎮めた「この男の希望は、福音

に従って生きることを認めてもらうことだけです。それは人の力ではできないことだ、とわたしたちが宣言するなら、福音に従うことを不可能と宣言し、福音書のおおもとであられるキリストを、あざけることになろう」この言葉が教皇に感銘を与えフランシスコは再びラテラノ宮殿に召喚されることになった、第三度目の謁見である

(教皇の夢は有名な話、割愛) 招かれたフランシスコは教皇に感謝するとともに用意していた説教のような話を教皇にした。 (割愛) 話を聞いた教皇は側に立っていた枢機卿たちの方を向いて「たしかにこれは、神の教会を再建すべき、聖く敬虔な男だ!」と大声で言って、立ち上がり、フランシスコを抱き、彼と兄弟たちを祝福していった「兄弟たちよ。神と共に行き、主があなたがたにお示しになったように、すべての人に改心を宣べ伝えなさい。全能の神があなたがたの数をふやされたら、安心して戻ってきなさい。わたしは喜んであなたがたにもっとたくさんのことを認め、もっと多くの任務をゆだねましょう」兄弟たちはみな教皇の前にひざまずき、服従を誓った。その後で教皇の命によって、11人の兄弟は上長としてのフランシスコに服従を誓った。説教の許可も同じように与えられ、又彼を通じて、他の兄弟にも与えられた。説教の許可も同じように与えられ、又彼を通じて、他の兄弟にも与えられた。謁見の終わりに、兄弟たちはついに剃髪をうけた。それは神のことばを宣べ伝える許可を外的に示す徴であった。4月26日であった。(口頭承認と言われている)

教皇のことばに教会の改革の必要性がにじみ出ている点に注目です。教会自体の改革の必要性は 内部でも認識されたいたことが分かります。

(2)司祭ジルヴェストロが弟子入り

この後間もなく前述の司祭ジルヴェストロが弟子入りしている。彼は悶々と悩み罪を悔い改めフランシスコの門を叩いた。当時すでに出来上がっていた会則によって、全ての財産を処分し貧しい人に施しをしてこなければならなかった。彼はそれを実行した。小屋には彼を受け入れる空間が既になかったので彼は小屋の側にひとり用の小屋を作って住んでいた。司祭という教会の公式メンバーが平信徒の集団に自ら進んで入ったことになる。又組織の運営という厄介な問題解決にも貢献できる立場と知識を持っていた。フランシスコ会の最初の司祭である(ヨルゲンセン著p112)

(3)フランシスコの説教の影響

1210年9月9日アッシジの大憲章

フランシスコの調停により上層階級と下層階級の和解がなされる

「教皇の権威によって公明正大に」宣教活動が出来るようになったが、フランシスコの生活や説教には変わりはなかった。グイド司教の顧慮によってアッシジの司教

座聖堂であるサン・ルフィーノ聖堂での説教を任されたことによって大衆にその教えが広まった。アッシジの遠くに及んだ「この地方の全貌が変わった。恵みと実りをもたらす河のように、フランシスコはこの地方を流れ、心の畑を潤し、徳の花を開かせた」p112

13世紀のイタリアは封建制度が確立し、身分の上下関係の厳しい時代であった。 その上に神聖ローマ帝国と教皇との領土争いがかさなり、社会の混乱は凄まじく内 乱が続発していた。

社会は大別して、王侯、貴族、騎士、高位聖職者からなる上層階級(マヨーレス) と下級聖職者、農民、商人などが属する下級階級(ミノーレス)分かれていた。市 政における格差をめぐっての対立は多くの都市にあったがアッシジではフランシス コの平和の調停により両者に和解が成立した。

この影響はアレッツォ、ペルージャ、シェナに及んだという

フランシスコはミノーレス(小さな者)に属していたこと、信仰的にはイエス・キリストの最大の謙遜、神ご自身が、神としての姿を捨てて、貧しい人間となられた受肉の謙遜にならって「アッシジの改心者」のグループ名を「小さい兄弟の修道会」と名づけた。

1211年の出来事

(1)リヴォ・トルトからポルチウンクラに戻る

1211年のある日のこと兄弟たちが小屋にいて、それぞれ静かに祈っていたとき、不意に百姓がろばをひいてきたが、ろばにむかって「入れ、ろばめ、ここは居心地がいいぞ」と叫んだ。百姓はここの地主であった。こうしてリヴォ・トルトから去ることになったが、ちょうどベネディクト会からポルチウンクラ聖堂を委ねられその側に、木の枝や葉や泥で小屋を造って住むことになった。寝床はわら袋、地べたが机と椅子、囲が修道院の壁という粗末なもので、これがフランシスコ会の最初の住まいとなった。このころには弟子の数も増え、ルフィーノ、マッセオ、レオーネらが加わっている。ルフィーノはクララの親戚、荒野の隠者にならった孤独な禁欲な姿勢が強く祈りと観想にふけるタイプ、最初の弟子ベルナルドに似ている。マッセオはフランシスコの旅の常任従者で「美丈夫で、口達者で話術に長けていた」レオーネ、フランシスコの聴罪司祭と秘書を兼ねた最も信頼した弟子でフランシスコは彼を「兄弟神の小羊」と呼んだ。この三人とアンジェロが現在の聖フランシスコの墓の天蓋に描かれている。

更に冬から翌年の春にかけてジルベストロを伴ってトスカナに向かい途中ペルージャでは「平和の仲立ち」をしアレッツォに行った。

この間、後に重責を負う弟子を連れてきた。一人はエリア・ボンバローネ(大聖堂や学校を建てる)、そして、後に総長となるアルベルト、更にジョバンニ・バレンティ(ボローニャ大学出の優れた法学者)である

(2)クララ、フランシスコの説教を聴く

フランシスコはこの年の四旬節はずーとトラジーメ湖の無人島での 厳しい自己との格闘と祈りの日々を過ごしていた。

1211年春(四旬節)サン・ジョルジュ聖堂で説教を聞いた。

クララとの出会いを記す前にクララについて簡記します

クララ イタリア語で、キアーラ 耀く女の意味)

まことに厳しく才色兼備、耀くように美しい娘で幼いときから、並みはずれて信心深かった。クララは生涯を俗世と隔絶した修道院で過ごしたことから厚い神秘的ベールで覆われている。

彼女は好んで自分をフランシスコの植えた草花(小さき苗木)と呼んでいる。 クララの生い立ち

1194年7月11日生まれ、アッシジきっての名家貴族ファバローネ・オフレドゥッチオ家に生まれ、市の中央のサン・ルフィーノ広場にあった宮殿のような住居で育った。

父の名ははファバローネ・オフレドゥッチオ、母はオルトラーナ、

財産といい部下の数といい、小王国のようでアッシジ第一の名門貴族出身である 誕生は祝福され、賢さは称賛された。

1198年アッシジの内乱(貴族と市民の抗争)を逃れて貴族であるクララ(4歳)は家族一同でペルージャに移住してアッシジに戻ったのは1205年(9歳)の冬である。

クララは戦乱の中で育った。同じ住民が戦って血を流し、命を落とす。恐ろしい光景を見て育った。回心の転身は彼女の天性の資質と篤信な母の姿から影響を受けている。

オルトラーナ夫人も才女の誉れ高く、又、信仰も深い人だった。女の旅の難しい当時にあって各地の聖地巡礼やローマ巡礼をおこなっている。母の信仰によってクララの無垢・清純な乙女ごころに聖者讃仰に火を点じられた。

15歳、1208年最初の求婚者が現れた。貴族の令息であった。父は賛成した。 クララはキッパリと断った。この時期クララはフランシスコとの出会いはないが 1210年法王庁から口頭認可を受けたフランシスコが積極的に宣教を始め、アッシ ジの聖堂で説教する機会も増えていた。 放蕩息子から宣教者になったフランシスコの噂は町中で知らないほどに有名になっていた。クララの父方の従兄弟であるルフィノはフランシスコの門を叩いていた。 クララの心が揺れ始め、ひそかにフランシスコの生きかたに憧れを抱いた。

1211年春(四旬節)サン・ジョルジュ聖堂で説教を聞いた。クララがフランシスコと直接顔を合わせた始めて、それまでは面識がなかったが、彼女の友人ボナ・ グエルフッチオにこの気持ちを打ち明けた。

その後約1年間フランシスコの「悔い改めと平和」の説教を聴き、彼の生活態度を 見て「彼の生活こそ自分の生活になるべきで、それこそ神のみ旨であることをはっ きりと悟るにいたる。

クララと出会ったフランシスコは四旬節の間、アッシジから離れトラジーメ湖の無 人島ですごした。

1212年の出来事

(1)クララ、弟子となる

1212年春(枝の主日) クララは家を出てフランシスコのもとに身を投じた。ポルチウンクラの天使マリア聖堂において入会式行われる。

この日の朝、クララは一番の晴れ着を着て、母や妹たちとミサに参列した。聖壇でグイド司祭がオリーブの枝を祝別して、信徒がそれを拝受するために祭壇に向かって列をなした。一人だけ席を動けなかったのがクララであった。クララはその夜、家族との決別を実行する決意をしていた。「長い年月が同郷の者をひそかに結びつけた優しく強い絆が、この厳かな瞬間に彼女の心の中で切れ、胸苦しくしたのだろう」

その日の決行を知っていたグイド司教はクララのうなだれた頭、すすり泣く肩を見て、その心中を察した。彼は優しく枝をクララの席に持って行った。

その夜、クララは逃亡を決行した。予知していた父は女性の手では外出することが

難しいほどの薪を門に積んで外出することを阻もうとしていた。 クララはその薪を崩して通り抜けボナ・グエルフッチオに付き添われポルチウンクラに向かった。待ち受けていたフランシスコ会の人々は松明をかかげて森の中で彼女を迎え、彼女は礼拝

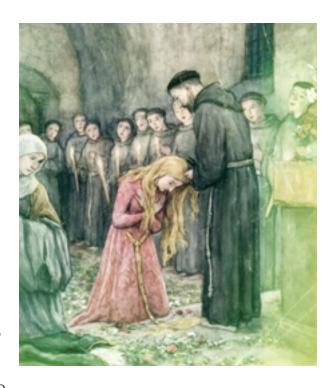


堂の聖母の絵の前にひざまずき、既に書いていた告別の手紙をおいた。

彼女は晴れ着を兄弟たちに手渡し、代わりに兄弟たちのと同じ、粗い毛織りの修道 服を受け、宝石で飾られた帯を、結び目のあるあら縄に着替えフランシスコの前に 出た。クララはフランシスコの前にひざまずき「清貧」「貞淑」「従順」を誓い「頭

を下げて、そのしなやかな髪をフランシスコのハサミの前に差しだした。フランシスコの手は、かすかに震えていた。クララは、それに気づかなかった。祈りに没頭していたのである」

フランシスコのハサミで彼女の見事な ブロンドの髪が切り落とされた。彼女 は重い黒いヴェールをかむった。刺繍 のたくさんついた靴の代わりに木靴を 素足にはいた。三つの修道誓願をたて、 更に兄弟たちのようにフランシスコに 従順する誓いもたてた。入会式がすみ、 貴族の令嬢クララは修道女クララとなっ た。その夜のうちにパスティアのベネ ディクト修道院サン・パウロに連れて行っ



た。かねて定めておいた住まいだった。その住まいは家族に隠しおおせず父と親戚たちが修道院にやってきて、帰るように説得したが18歳の娘は聞き入れなかった。 父と叔父が手荒なまねをしようとすると彼女は聖壇の祭壇にしがみつき、ヴェールをはねのけて髪を切った頭を見せた。

父や親戚の執拗な追尾を逃れるために逆方向のスバジオ山のサン・タンジェロ・ディ・パンゾ修道院に隠れた。この修道院に移ってから数日後妹のアグネスが飛び込んでくる。アグネスは結婚式が決まっていた

二人の娘の逃亡に父の怒りは心頭に発し、弟に武装した12名の家来を率いてアグネスを連れもどすように命じた。彼女は殴られ蹴られ髪をつかんで修道院から引きずり出された。アグネスは力の限りに反抗し「クララ助けに来て!」と叫んだ。なかば死人のようになったアグネスをクララは修道院に戻した。二人はサン・ダミアノ教会付属の小修道院に移ることができた。サン・ダミアノ修道院はフランシスコが主から修復を命じられた聖堂である

清純な心清、清貧と喜びの生活は多くの女性を惹き付けクララのもとに集まって来た。近くに小さな建物が出来、クララは召されるまでそこに住んだ。1215年クラ

ラはフランシスコの厳命によってサン・ダミアノ修道院の院長になったが謙遜に下

働きに徹し弟子の足も洗った。「命じるよりは進んで自分で行った」



この冬の大部分をフランシスコはキウジ付近の山上サルティアーノの庵ですごした。そこからはアッシジの街がよく見えた。彼はこの孤独のなかで激しく(結婚への)誘惑され絶望しそうになった。

迷ったあげく神の判断を仰ぎ、二人の霊的な友へ相談した。 二人の答えは「あなたが説教に出かけるのが神のみ旨である。 なぜなら、神はあなた自身のためばかりでなく、他人の救いの ためみも、あなたを召されたのだから」と一致していた。この

問答のとき、フランシスの頭上に主の手が置かれ、聖霊の炎に燃え立ってとびあがり、天よりの力に励まされ、この答えの使者であるマッセオに向かって『さぁ、行こう!』と言ってカンナーラとベヴァーニャ方面にむかった。ここで有名な小鳥たちへの説教がなされた(p170)

フランシスコの愛の昇華

「アッシジの貧者」の著者は冒頭でレオネ(聴罪司祭の弟子・三人の伴侶の一人) をして語らせている

「あの貴族ファバローネ・オフレドゥッチオの娘キアラに対するあなたの恋も?それを知っているのは私だけだ。気の小さい人々は、あなたが彼女の魂だけを愛しているのだと思っている。でも、なによりもまずあなたが愛していたのは、彼女の肉体だった。あなたはこの愛から出発し落とし穴と誘惑だらけの道を通り、長いたたかいを経た後に神のご加護でキアラの魂まで到達したのだ。しかもあなたは彼女の魂を愛しながらけっして彼女の肉体を諦めずそれかといって、指一本触れようとしなかった。この肉体の愛は、障害になるどころか、あなたを神へと導いた。なぜなら、神はあなたがおおいなる秘密を知ることをお許しになったのだから。どのような道を辿り、どのようなたたかいを経て、肉が霊になるのかという秘密を。女であれ、息子であれ、母であれ、祖国であれ、思想や神であれ、すべての対象にむかって、あるのは唯一つ、いつも同じ愛だ。愛のもっとも低い階梯においてであろうと、打ち克つこと、それが天国に通じる道を開くことである」(「アッシジの貧者」p11)

フランシスコはクララを愛していた。しかも気高く愛していた。この愛は肉体を通 して魂にまで到達した。愛の昇華である。 クララ着衣(1212年春から1215年ラテラノ公会議)の間、フランシスコが「激しい肉の誘惑」に襲われて苦しんだことが伝えられている(オ・エングルベールの伝記)「苦しい修道生活を送るよりも、幸福な家庭を築き、子どもを育てて暮らす人生を憧憬する」という内容の苦しみ人間的な苦悩であるフランシスコの「貞淑」の思想の根がここにあるのだろうか。

(2)ジャコマと出会う

ローマの貴族の夫人で世俗にいながらフランシスコの教えを実践する「第三会」の 創設に貢献した人である。(詳細は後述の予定)

(3)フランシスコ、弟子を伴ってシリア伝道に向かうが舟が難破し不成功に終わる。

おわりに

旅は求めているものを明瞭に示すことがあります。今回の旅で自分の常識の質を向上させたいとの欲求が聖フランシスコ伝の再読につながり、新しい発見、年齢を重ねなければ発見できなかったことがたくさんあります。着手するとより正確により深くという欲求が高まり一つの年代を確定するのに時間がかかります。学生時代のゼミナールを懐かしく思います。独学しながら、誰にも聞けず苦悩していると」共に学ぶことは共に助け共に希望を語ること」なのだと実感しています。

今回も年代にはそのようにしか読めないと思われる多くの仮説をたてました。

9月25日、「アッシジの貧者」N.カザンツァキ著を入手しました。懐かしい2段組の文字が一杯の本です。昼しか読めない小さな文字との戦いを10月はします。 N.カザンツァキが何故この本を書いたのか裏表紙から引用します。

「人類が破局に向かっており、世界は虚無の縁に立たされていることを、繰り返し 言わねばならないからだ。私の書物は決定的な日を引き延ばそうとして書かれてい るのだ。聖フランシスコの生涯を書いたのはわれわれの世界にとって、聖者でもあ る英雄が必要だからだ」

日本の独裁政権に人々が気がつくか否かの選挙が独裁者によってなされようとしている2017/09/26